

日本野球界のさらなる発展策に関する研究

Research on further Development of
Japanese Baseball

1K08B137-6

指導教員 主査 平田竹男 先生

仲間 一茂

副査 中村好男 先生

【序論】

筆者は小学生の頃より野球を始め、中学、高校、大学と続けてきた中で、様々な疑問を感じるがあった。この野球界を身近に感じる環境の下、現在の野球界が抱えている問題を探り、改善策を考え、野球界の発展の為に提言していきたいと考えた。

第1章では、研究に至る問題意識と、研究の目的を述べた。先行研究の「野球道の再定義による日本野球界のさらなる発展策に関する研究」(桑田、2010)においては現役のプロ野球選手のアマチュア時代

(中学・高校・大学)に受けてきた指導内容とその評価について、セカンドキャリアとプロアマに関する意識調査の結果があきらかにされた。また、飛田穂洲の提唱した「野球道」の理念が戦後まで受け継がれ、その精神が学生野球憲章に継承され、現代まで野球界に脈々と受け継がれていると述べられている。本論文ではこの精神を受け継いでいるのであろう早稲田大学野球部に所属する全ての部員を対象にアンケートを実施し、アマチュア野球界の問題点を抽出し、アマチュア野球界、さらには、日本の野球界のさらなる発展に向けて提言を行うことを目的とした。

【手法】

第2章では、日本アマチュア及びプロ野球の歴史の中で「野球道」に象徴される武士道的精神野球の指導理念がどのように形成、継承されてきたのかということについて、過去の書籍、ホームページなどで文献調査を行った。また、早稲田大学野球部員を対象にアマチュア時代(中学・高校・大学)に受けてきた指導内容とその評価について、体罰のことについて、早稲田のことについて、部員が思うプロ野球について、アンケート調査を行った。

【結果】

第3章では、早稲田大学野球部員に対するアンケート調査結果を分析し、今後アマチュア野球界が発展していくために必要なこととして、指導者に関する回答、プロアマに関する回答が多いことから、育成システムとプロアマ関係の問題点を抽出した。指導者についての質問で「自分が指導者になった時同じ内容の指導をしたいと思うか」という質問に対しての回答は、どの代も「はい」が50%以下となって

いる。その中では、高校の時の指導が最も選手に影響を与えている。全体としては、指導者の指導に納得がいないことが分かった。

また中学、高校、大学と少なからず体罰があるのが事実で、体罰は決して許されるべきものでないにも関わらず、「必要、時には必要である」と考えている者が中学で58%、高校で66%、大学で60%と圧倒的に多い。中学の「指導者から体罰を受けたことがある」の回答が37%と多く、ここでもまた中学レベルでの指導者の問題点が浮き彫りになる結果となった。

【考察】

第4章では、研究結果からの考察を行った。アンケート結果や野球界の組織から、今後野球界がさらに発展していくためには、次世代の野球界を担う人材の育成システムに力を入れていくべきだという結論に至った。サッカーやラグビーの指導者資格制度を参考に野球界での資格制度について論じ、野球界での指導者資格制度の導入の考察を行った。この資格制度を浸透させる策として、硬式野球指導者カリキュラムを作り、中学、高校、大学においてそれぞれが習得できるレベルを設け、中、高、大学と現役選手中にこのカリキュラムを順次習得できるようにすれば良い。大学卒業時点でこのカリキュラムのすべてを習得できるように設定し、高校で引退しカリキュラムが途中の者は、後に最終カリキュラムまで習得する。といった方式にすると、指導者全体に同じ指導カリキュラムで普及されていくことが可能である。

【結論】

アンケート調査の結果、指導内容や指導者に関する問題点が抽出された。これは、今後野球界に指導者資格制度がつくられていけば改善できると考える。さらには、日本野球界のトップにある日本プロ野球協会がこの育成に関しても関与し、アマチュアとの壁のないJFAのように縦に1つの組織のもと、有望な選手がつぶれることなく育成されていくことで、今後の野球界の発展につながると考えられる。